毛利藩の江戸葛飾抱屋敷について

PALACE OF MOURI-HAN AT KATSUSHIKA IN EDO DURING EDO-ERA

岡田 悟*

Satoru OKADA

During Edo-Era Mouri-Han had some palaces in Edo, the capital of Japan. Through the examination of historical materials on the palace at Katsushika in Edo, following results are ascertained;

- (1) The palace was built in 1824 as a retreat of lord.
- (2) Lord, his wife, concubine, son and three daughters lived there.
- (3) The palace was composed of main, back and west building.
- (4) Lord, his concubine and three daughters lived at main building.
- (5) Lord's wife lived at back building and his son lived at west building.

Keywords : Palace, Retreat, Lord's family, Edo, Mouri-Han

御殿、隠居所、藩主家族、江戸、毛利藩

1. はじめに

藩政期には、各藩は江戸に上屋敷、中屋敷、下屋敷、抱屋敷を所有していた。前3者が拝領屋敷であったのに対し、抱屋敷は郊外の代官支配地に成立した武家所有地^{*1)}、年貢地であった。上屋敷は藩主の居所として、中屋敷は隠居した藩主やその家族、あるいは、世子の居宅として、下屋敷は郊外の遊園として、また、上屋敷や中屋敷が火災等に遭った際の避難邸としてそれぞれ用いられたことが指摘されている^{*1)}のに対し、抱屋敷については、土地制度面からの研究^{*2)}以外には研究例は極めて少なく、不明な点が多いまま残されている。また、武士住宅全体を対象とした研究(文献1~3等)においてもほとんど取り上げられていない。

従来、武士住宅研究上の関心は、近世的な秩序を具現し武士社会そのものが凝縮的に演じられる公的行事空間に注がれてきた。こうした研究の対象としては、藩主の居所である居館や上屋敷が相応しく、これらを中心とした研究も数多く行われ^{*3)}、毛利藩においても上屋敷については詳細な研究が行われてきた(文献4~6)。これに対して公的性格が薄い中屋敷、下屋敷は重視されず、郊外にあった抱屋敷を対象とした研究としては、管見する限り、葛飾を含む3箇所の抱屋敷^{*4)}の経緯を述べたもの(文献7)があるのみである。しかしながら、今回対象とする葛飾抱屋敷には、後述するように10代藩主斉熙が隠居後死去するまで11年間居住し、上、中、下屋敷と同様に藩主やその家族の居住に利用された施設としての共通性が見出されることから、これについて建築形態や利用状況を検討する意

義が見出せよう。

本稿では、こうした特徴を有する葛飾抱屋敷について、文献や絵図から建物配置の変遷、平面構成、居住状況等を明らかにし、毛利藩の上屋敷等の諸施設との関連性を検討するための一助としたい。

2. 葛飾抱屋敷の資料と沿革

2-1 資料

葛飾抱屋敷は鎮海園とも呼ばれ、文献10はこの屋敷について述べたものである^{*5)}。安政6年(1859)の「御江戸絵図」(文献9所収)にはこの敷地(図1)が描かれている^{*6)}。

葛飾抱屋敷を描いた図として、以下の8点^{*7)}が遺され、表現方法や描かれる範囲が各図で必ずしも一致しないが、すべて同一敷地の全体、あるいは、一部を描いたものである。

- ①「文政四五年諸事小々之控」所収、文政4年5月26日[31-20]
- ②砂村平井新田御抱屋敷図、文政7年[58-512]
- ③「文政八九年諸事小々之控」所収、文政8年5月26日[31-20]
- ④「文政八九年諸事小々之控」所収、文政8年9月6日[31-20]
- ⑤葛飾邸図二枚之内壹[58-511]
- ⑥葛飾御屋敷図三枚之内(3)[58-513]
- ⑦葛飾邸図二枚之内式[58-511]
- ⑧葛飾御屋敷図三枚之内(1)[58-513]

①~⑥の6枚には敷地と敷地内の建物の配置状況が描かれている。

①~④は描かれる範囲が一致し、表現方法も共通するが、略図であ

* 共立女子短期大学生活科学科 教授・工博

Prof., Dept. of the Science of Living, Kyoritsu Women's Junior College, Dr. Eng.

り、寸法、形状、位置等の正確さは期待できない。⑤⑥は描かれる範囲が一致し、①～④に比して大版でより正確に敷地の形状、寸法や建物の配置を示していると考えられる。一方、⑦⑧は建物の平面図で、敷地内の他の建物や敷地全体は描かれていない。

①は「葛飾郡砂村平井新田之内立花左近将監様御所持被成候分此御方江御譲請被成候一件之事」と題された文書^{*8)}(以降①文書と略称)と共に描かれる図であり、①文書には葛飾抱屋敷の建物について記されている。③④にも①と同様の文書(以降③文書^{*9)}、④文書^{*10)}とそれぞれ略称)が付せられている。また、⑧には図についての説明が記された2枚の貼紙^{*11)}が付せられている。

斉熙家族に関する資料の内、斉熙が葛飾抱屋敷に居住した文政8年～天保7年のものとして文献11、12が挙げられる。文献11中の文政7年8月の文書^{*12)}は、書式が①文書、③文書、④文書^{*8)～10)}と類似し、年号が②に一致することから、以降②文書と略称する。また、斉熙付藩士の日記である資料13が遺されている。その他、各種の記録(文献16～19)には、上、下屋敷との間での藩主家族の移居や、葛飾抱屋敷付藩士等について記されている。

2-2 沿革

葛飾抱屋敷は西葛西領砂村新田と同平井新田とにまたがって位置し^{*13)}、①文書^{*8)}より①は文政4年(1821)に葛飾抱屋敷地を譲り請けた時の図であることが知られるが、これ以前の寛政2年(1790)～享和2年(1802)にも毛利藩が所有していた^{*14)}。10代藩主斉熙は文政7年(1824)に隠居して櫻田上屋敷より新橋中屋敷へ移居し、翌8年2月に葛飾抱屋敷へ移居し、続いて家族も移居した。斉熙は移居から11年後の天保7年(1836)5月に死去し、遺骸は葛飾から萩に運ばれ、家族も葛飾抱屋敷から移居した。斉熙死後は敷地の一部を天保12年(1841)、弘化2年(1845)に割譲した^{*15)}。

また、敷地内の建物については、以下に述べるように、譲受後の文政4年～7年にはほとんど建物が建設されず(第Ⅰ期)、文献16文政7年9月5日条に「葛飾砂村別邸手斧初」と、また、文献10に「経始于文政甲申(＝7年)之秋、越乙酉(＝8年)春二月成」とあるように、文政7年9月～翌年2月に主要な建物が建設され(第Ⅱ期)、文政8年以降に建物の増築や取り壊しが行われた(第Ⅲ期)。

これらの経過、および、続く3、4章で検討した結果を下記の葛飾抱屋敷年表(以降年表と略称)の該当する箇所記した。建物の建設、および、絵図資料の欄には上記の第Ⅰ～Ⅲ期を書き入れた。

3. 葛飾抱屋敷の居住者、および、居住期間

斉熙には正室三津姫、側室須磨浦、側室志津、側室住崎がいて、3男6女をもうけた。3男6女の内、斉熙が隠居した文政7年時点で斉熙と同居する可能性があった者は、三男信順(卿之助)、三女萬壽姫、五女八重姫、六女安喜姫(章姫、美知姫)であり^{*16)}、この4名の実母は側室須磨浦であった。文政7年(1824)12月の記事として「御二方様并御子様方御一所二砂村御屋敷江御住居被成候思召之段」(文献11)とあるように、斉熙は家族揃って葛飾抱屋敷に居住したい意向であった。翌8年2月19日には「砂村御屋敷御普請御表御奥向共此日出来二付、大殿様来ル廿七日、万寿(＝萬壽)姫様、八重姫様、章姫様二者翌廿八日可被遊御引移との御事」(文献11)とあり、斉熙(＝大殿様)は文政8年(1825)2月27日に、娘3名は同28日に葛飾抱屋敷へ移居したと考えられる。萬壽姫は天保6年(1835)12月21日に對馬藩主宗家へ嫁した。

文献16文政8年8月29日条に「卿之助君葛飾邸二移ル新御殿ト唱フ」とあり、卿之助が移居したが、その後同天保3年(1832)2月28日条に「卿之助君麻布邸へ移ル」とあるように、葛飾から麻布下屋敷へ移居した。文政9年7月17日には「葛飾御裏御殿御普請成就二付、大御前様去月廿六日御機嫌能被遊御引移候事」(文献12)とあり、正室(＝大御前様)が下屋敷から葛飾抱屋敷へ移居した^{*17)}。

一方、文献16文政8年6月5日条に「御長屋様斉熙公ノ妾濱屋敷へ移居ニツキ向後御部屋様ト唱ヘシム」とあるが、ここに言う「御長屋様」は側室志津を指す^{*18)}。「濱屋敷」は萩城下にあり(文献21)、その後志津は天保9年に濱屋敷で死去し(文献18)、葛飾抱屋敷に居住したことを示す記録は見出せない。天保7年(1836)5月14日の斉熙死去後は、文献16同年10月朔日条に「法鏡夫人斉熙公室麻布邸へ移ル」とあり、翌2日条に「八重姫、安喜姫、玉温院斉熙公側室轉居、麻布新御部屋ト唱フ」とあり、正室(法名法鏡院)、側室須磨浦(法名玉温院)、八重姫、安喜姫が麻布下屋敷へ転居したことが記されている。斉熙死去直後であること、正室、八重姫、安喜姫が葛飾抱屋敷へ移居していたこと等から推して、葛飾抱屋敷から転居したと考えられる。側室須磨浦については、葛飾抱屋敷へ移居したことを示す記録は見出せないが、天保3年(1832)に斉熙が一時国許へ帰る計画があった折に、不在中の家族の居所について「御姫様方御内證様二ハ麻布江御住居被遊候様二との御事」(文献11)とあり、「御内證様」は側室須磨浦を指す^{*19)}ことから、天保3年以前から葛飾抱屋敷に居住していた可能性が高い。

表 葛飾抱屋敷年表

年号	敷地の購入・割譲	建物の建設	期	人物の移居(移居前→移居後)、居住期間(矢印)								絵図資料	期
				斉熙	正室	卿之助	萬寿姫	八重姫	安喜姫	須磨浦			
寛政2(1790)	農家より購入												
享和2(1802)	堀田氏に譲る												
文政4(1821)	立花氏より譲受		I									①5/26	I
文政7(1824)												②貼紙朱書前 貼紙朱書後	
文政8(1825)		9/5手斧始 2月成 2/19御表御奥 出来☆1	II	2/27中屋敷 →葛飾☆1				2/28→葛飾☆1					II
文政9(1826)		御裏御殿御普請 成就☆2			6/26下屋敷 →葛飾☆2	8/29→葛飾						④9/6 ⑤5/26 朱書前 朱書後 ⑦文政8年2月以降か	
天保3(1832)						2/29 →下屋敷							
天保6(1835)			III										III
天保7(1836)				5/17葛飾で 死去	10/1→下屋敷							⑤天保6年以降か ⑥は⑤より後	
天保12(1841)	松平大和守に割譲											⑧天保7年10月以降か	
弘化2(1845)	松平出羽守に割譲												

以上より、八重姫、安喜姫は斉熙の居住期間にほぼ重なる文政8年～天保7年に、正室は文政9年～天保7年に、卿之助は文政8年～天保3年に、萬壽姫は文政8年から天保6年に稼すまで居住し、側室須磨浦は天保3年以前から天保7年まで居住していたと考えられ^{*20)}、それぞれ年表の人物の移居、居住期間欄に矢印で示した。

一方、文献16に「葛飾邸ニ於ケル江戸當役ヲ用掛リトナシ手元役以下専任兼務吏員数十名ヲ置ク」とあるように、隠居後の斉熙付きの藩士が任じられ、こうした人々も葛飾抱屋敷に居住していたと考えられる。毛利藩では他藩の家老に相当する役職として、国許に当職を、江戸に当役をそれぞれ置いたが、江戸当役とは別に「葛飾御家老」の職が見られる^{*21)}。「葛飾邸ニ於ケル江戸當役」はこの「葛飾御家老」を指し、文献13標題に見られる「葛飾御當役」も同義であり、葛飾抱屋敷関係の藩士の筆頭職であったと考えられる。また、文献19に藩士の役職として「御裏年寄役」が「単二裏老トモ云フ、侯家奥向ノ家老職ニシテ老練高禄ノ士ヲ以テ之レニ任ス、奥番頭ノ次班タリ」とされ、藩主正室には家老に相当する「裏老」の職が設けられていた。この職は藩主死去後の正室にも設けられた^{*22)}。

4. 建物配置の変遷

4-1 文政4年～7年(第Ⅰ期)の建物配置

文政4年の①を図2-1に示した^{*23)}が、南を上にして描かれ図1とは上下逆になる。敷地北側が往来に面してここに主たる入口を設け、南は海に達する。敷地^{*24)}と12棟の建物外郭線とが墨書きで描かれ、建物毎に坪数が書き入れられている。建物はすべて「建家」と呼ばれ^{*8)}、稲荷社を除く11棟の合計面積は209坪であり^{*25)}、また、建物、門^{*26)}については「有来」「有方之儘」と記されている^{*8)}ことから、これらは文政4年の購入時にすでに建てられていたものと判断される。

①の3年後の文政7年(1824)に描かれた②には貼紙4箇所、および、墨書きと朱書きの使い分けがされ、貼紙下に朱書きが見られず貼紙には朱書きのみが見られる。敷地内の建物の状況が貼紙朱書の前後で大きく異なることから、貼紙朱書前の状況を図2-2に示し^{*27)}、貼紙朱書後を図2-3に示した^{*28)}。

貼紙朱書前(図2-2)には、①に描かれていた12棟、および、①には描かれていない敷地西辺の20坪の建物が墨書きで坪数と共に描かれている。これは①から②貼紙朱書前への間にこの1棟が増築されたことを意味し、①での建物面積合計209坪が②文書^{*12)}の「有来家」229坪へと20坪増加していることに符合する。従って、文政4年から貼紙朱書前までは建物の増設はほとんど行われず広大な敷地に小規模な建物が散在する状況であった。この文政4年購入時から②貼紙朱書前までを第Ⅰ期とする。続く4-2で詳説するように、②の貼紙朱書の前後は文政7年8月で区分されると考えられる。この状況を年表の建物の建設、絵図資料欄に示した。

4-2 文政7年～8年(第Ⅱ期)の建物配置

貼紙朱書後(図2-3)には、墨書きされていた20坪、8坪、3坪、14坪の計4棟と門3箇所との上の貼紙に、朱書きでh～jの3棟、および、朱書き黄色塗りの3棟が描かれ、最終的に、墨書き13棟の内貼紙下となった4棟を除く9棟、名称、坪数、寸法等が書かれる朱書きの12棟(図2-3 a～1)、および、朱書き黄色塗りで坪数が付記される4棟が描かれている。②文書^{*12)}には①文書^{*8)}に

見られない「増家貳千七百坪」という表現があるが、②文書中の「千百七拾坪之本家」から「拾六坪之建家」まで計12棟を「新規家作仕度」ことが「増家」の内容と考えられる。これら12棟は②の朱書12棟と名称、規模、寸法が一致する。また、②文書^{*12)}で「有来」とされ「東之方江引」とされる4棟は、貼紙下の墨書き4棟、および、朱書き黄色塗りの4棟と面積が一致することから、朱書き黄色塗りの4棟は、h～jの3棟を新築するのに伴って貼紙下の4棟を東方へ曳き家した後の状態を示したものと考えられる。さらに、「有来木戸門三ヶ所是又東之方江附替作事」^{*12)}とあるのは、朱書きで描かれる門3箇所(図2-3)が貼紙朱書前から東方へ移動した形になっていることと一致する。従って、②の貼紙朱書後は12棟(合計面積1,630坪)の新築計画とそれに伴う従来からの建物4棟、門3箇所の移築計画とを朱書きで表現したものと考えられる。

②文書^{*12)}によれば「本家」の周辺に門が2棟設けられたことが知られる。この「本家」は②の「本棟」(図2-3 a)と同義であり、他の棟の名称についてはc～eの「塗垂」は蔵であったと考えられ^{*29)}、kが番所、lが建家とされる以外、すべて長屋とされている。また、図2-3 a～kの11棟は瓦葺、lと移築4棟とは茅葺であったことが記され^{*12)}、「北之方表通り」の生垣から矢来への変更^{*12)}も、②で朱書きで示されている。

文政8年5月に描かれた③を図2-4に示した^{*30)}が、これにも②と同様に墨書きの棟と朱書きの棟とが見られる。②と③とを対応させて見ると、②で貼紙朱書後に描かれていた建物は墨書き、朱書き、黄色着色等の区別なくすべてが③では墨書きされ、それらに加えて建物3棟が朱書きされている(図2-4 m～o)。③ではこの3棟にのみ坪数、梁間寸法、桁行寸法が書かれるが、その位置と数値は③文書^{*9)}で「新規」とされる3棟と一致している。また、「当時家作」が1,923坪と記されている^{*9)}が、この値は③で墨書きされる建物の内、「社」を除く24棟について、②に記されている坪数を合計した1,923坪に一致する。従って、②に朱書きされた12棟は、③が描かれた時点にはすでに完成し、③で朱書きされる3棟は次に建築する計画を描いたものと考えられる。従って、②に朱書きされた12棟が②文書の日付である文政7年8月から③に記される文政8年5月までの間に建設されたと考えられ、この時期を第Ⅱ期とし、年表にも第Ⅰ期と同様に書き入れた。

第Ⅱ期の建設は、先に挙げた資料に見られる文政7年9月の手斧初、および、文政8年2月末の斉熙と娘3名との移居に符合する。また、先に示したように、斉熙と娘3名が移居する理由として「御表御奥向共此日出来二付」とあり、この関係を年表で☆1で示したが、これら4名の居住する建物として「御表」と「御奥向」とが②の朱書建物に描かれていることになる。

4-3 文政8年以降(第Ⅲ期)の建物配置

文政8年9月に描かれた④を図2-5に示した。③の場合と同様に、③で墨書きされた建物も朱書きされた建物も④では墨書きされ、これらに加えて4棟が坪数等と共に朱書きされ(図2-5 p～s)、④文書^{*10)}で「新規」とされる4棟の位置、名称、面積等が④の朱書き4棟に符合する^{*31)}。「当時家作」とされる2,110.25坪^{*10)}は④で墨書きされる建物の内「社」を除く27棟について②③に記されている坪数を合計した2,110.25坪と一致する。従って、③の朱書き3棟は④が描かれた時点にはすでに完成し、④の朱書き4棟を次に

2-1 ①
(文政4.5.26)

2-2 ②貼紙朱書前
(文政7)

2-3 ③貼紙朱書後
(文政7)

2-4 ④
(文政8.5.26)

図2 凡例

- a: 本棟千七百拾坪
- b: 長屋六拾四坪 桁行十六間梁間二間半下屋九尺
- c, d, e: 塗垂二十一坪 桁行七間梁間二間半下屋三尺
- f: 長屋百三十六坪 桁行三十四間梁間二間半下屋九尺
- g: 長屋十五坪 桁行七間半梁間二間
- h: 長屋二十四坪 桁行八間梁間二間半下屋三尺
- i: 長屋八十六坪 桁行二十一間半梁間二間半下屋九尺
- j: 長屋百拾坪 桁行二十七間半梁間二間半下屋九尺
- k: 番所十坪
- l: 建家十六坪
- m: 建家百貳拾貳坪式合五勾
- n: 長屋四拾貳坪式合五勾 桁行拾六間半梁間式間半
- o: 長屋貳拾三坪七合五勾 桁行九間半梁間二間半
- p: 長屋貳拾坪 桁行拾間梁間二間
- q: 建家八拾七坪
- r: 建家三十坪
- s: 長屋八坪 桁行四間梁間式間

- 黒書き
- 朱書き
- 朱書き黄色塗り

図1
江戸絵図(部分, 安政6)

建築する計画が描かれていると考えられる。

③で朱書きされる3棟(合計面積187.25坪)は、mが建家、n、oが長屋とされるが、④ではm、nが建家、oが長屋とされている。④で朱書きされる4棟(合計面積145坪)は、同様に、朱書きされるものは建屋(q, r)と長屋(p, s)とに分けられている。これら以外のものは、③④ではa~lについてはaを建屋とする他は②に同じであり、a~l以外の棟は建屋とされている。

次いで、⑤⑥について、①~④に描かれる範囲と同じ部分をそれぞれ図3、4に示し^{*32)}、⑥の敷地全体を図5に示した^{*33)}。⑥の書き込み(図5)から、「此所大堀」とある部分とその北側部分との境が文政5年(1822)に作られた「古土手」で、この土手の北側も同じく文政5年に作られ、「此所大堀」部分がその後の文政9年(1826)に完成したことが知られる。斉熙らが移居した文政8年を挟んで北側から敷地整備が行われた様子がうかがえる^{*34)}。また、この書き込みから⑥は文政9年以降に描かれたものであることが分る。同時に図2における砂村新田13,957坪の部分が図5の斜線部分に該当することが理解される^{*35)}。

①~④(図2)と⑤(図3)とは表現方法が大きく異なり、敷地内の建物相互の対応が明確でないが、図2-3aに描かれる「本棟」は図3において内部をa~iに区分して書き込みがされている棟と同じと考えられる。図3でこの棟の西側、および、北側西寄りにそれぞれ門が1棟ずつ描かれているが、これらは先に述べた②文書^{*12)}に見られる「本家」廻りの「門式ケ所」に当ろう。図2-3h~jの3棟が図3で「御殿」(v)「相撲部屋、組ノ者固屋」(t, u)「諸役人固屋」の3棟に該当する。また、③で朱書きされる122.25坪の建家(図2-4m)、および、④で朱書きされる87坪の建家(図2-5q)は、⑤では位置から推してそれぞれ「卿之助様御殿」、および、「御家老」(図3n)に該当することから、④で朱

2-5 ④
(文政8.9.6)

図2 文政4~8年の建物配置の変遷(①~④)

図3 葛飾邸図二枚之内壹(⑤)の建物配置

図3 凡例

a: 御表	h: 安姫様	o: 作事	v: 御殿
b: 是ヨリ御奥	i: 八重姫様	p: 湯屋	w: タカヘヤ
c: 御二階五十畳	j: 供待	q: 仕出シヤ	x: 鷹匠
d: 御坐間	k: 御医者	r: 仕入ヤ	y: 金子繁平
e: 御中二階	l: 御小姓	s: 奥番頭	z: 御内證御成坐敷
f: 御鳥坐敷	m: 手元	t: 相模部ヤ	(水): 水面
g: 松葉印	n: 御家老	u: 組ノ者固屋	

図4 葛飾御屋敷図三枚之内(3)(⑥)の建物配置

図5 葛飾御屋敷図三枚之内(3)(⑥)の敷地(斜線は筆者)

書きされる4棟は⑤の時点では完成されていたと考えられる。

⑤(図3)には①～④に見られない「御裏御殿」が描かれ、その周辺の建物の状況も①～④と異なっている。「卿之助様御殿」と「御裏御殿」とは、先に述べた、文政8年8月に「新御殿」に卿之助が移居したこと、および、「御裏御殿御普請成就」を受けて文政9年7月に正室が移居したことにそれぞれ該当し、後者における建設と移居との対応を年表の☆2で示した。このことは文献11文政7年12月の記事に「御裏并卿之助様御座所御普請御入用銀御繰出被相成候ハ、御増作事被願出御普請取掛り等被仰付、出来次第大御前様、卿之助様御引移被遊候様可被相成との御事」とあり、「御裏」と「卿之助様御座所」とが「増作事」として建設されることになり、これらが「出来次第」、「大御前様」(＝正室)と「卿之助」とが移居するとされていることと符合する。また、「御裏御殿」の東側の棟に、正室付の職名である「裏老」の書き込みが見られることもこうした状況に符合する。従って、⑤はこれら「増作事」が終了した文政9年7月以降の状況を描いたと考えられる。

先に、「増家式千七百坪」という表現が①文書^{*8)}に見られず、②文書^{*12)}に見られることを述べたが、これは③文書^{*9)}、④文書^{*10)}にも共通して記され、文政7年以降の建築計画面積を示したものと考えられる。これに対し、②～④で朱書きされた建物の合計面積は1,962.25坪となり、2,700坪に対して700余坪少ない計算になる。⑤(図3)に描かれる主たる棟が図2-3における「本棟」に当りその面積が1,170坪であることを考慮すれば、図3の「御裏御殿」とその周辺の建物との面積は数百坪と考えられ、上記700余坪と類似した規模となることから、2,700坪の「増家」計画は「御裏御殿」とその周辺までを含むものであったと推測される。

⑤(図3)に描かれる主たる棟は⑥(図4)では「御殿」とされている。⑤の「卿之助様御殿」は⑥には描かれず、同じ位置に「東御殿跡」と書き込まれていることから、この時までに取り壊されたと考えられる。先に述べたように、卿之助は天保3年(1832)に葛飾抱屋敷から移居したと考えられるので、それ以後に不要となって取り壊された後の状況が⑥に描かれていると考えられる。従って、⑥は⑤より後を描いたことになり、①～⑥はこの順に描かれたものであることが判明する。文献16文政12年(1829)7月に「卿之助君住居新御殿之唱へ西御部屋ト改メ」とある。「新御殿」の語は、先に示したように文政8年に卿之助が葛飾抱屋敷に移居した際の記述に見られ、図4の「東御殿跡」は、この位置が敷地の中で西方に当ることから「西御部屋」の誤りである可能性が高く、そうであれば「東御殿跡」は「西御部屋」の跡に該当しよう。

⑥では①～⑤に比して描かれる付属屋が極めて少なく、⑤における「御裏御殿」の場所にも建物は描かれず書き込みのみが見られ(図4)、建物が省略されて描かれている可能性がある。従って、葛飾抱屋敷の最も整備された時期の建物配置状況は⑤(図3)に示されていると考えられる。

「増作事」が行われ、「卿之助様御座所」「御裏御殿」が建設された文政8年以降、即ち③朱書き以降の時期を第Ⅲ期とし、年表に書き入れた。

4-4 建物配置の変遷と特徴

文政4年(1821)の敷地譲受からの建物配置は第Ⅰ～Ⅲ期の3段階に分けられ、第Ⅱ期には「御表御奥向」の建設、第Ⅲ期には「卿

図6 葛飾邸図二枚之内式(⑦)の建物と庭

図7 葛飾邸図二枚之内式(⑦)の平面図

図7、9凡例

座：御座の間、御座ノ間	湯：御湯殿
二：(御)二ノ間	湯：御湯殿
小：御小座敷	板：板敷、板之間
休：御休所	土：土間
上：上ノ間	坪：中坪
茶：御茶ノ間	廊：廊下、御廊下、ろうか、御ろうか
化：御化粧ノ間	床：(御)トコ、御床
台：御台子	棚：棚、タナ、御タナ
服：御服ノ間	戸：戸棚
納：御納戸	押：押入、ラシ入
佛：御佛間	(階)：階段の表示
清：御清間	(段)：段差の表示

図8 葛飾御屋敷図三枚之内(1)(⑥)の建物と門

所であったと考えられる。また、⑤で白色の2棟は、図3では建物外郭線でのみ表したが原図では蔵と考えられる姿に描かれ、図2-3から図2-5に示される塗垂3棟の内の2棟に該当し、⑥(図4)に描かれる「御蔵」もこの内の1棟に該当しよう。

敷地内の様子を見ると、⑤(図3)には建物の間を縫って設けられた多数の掘割や「船頭」と書き込まれた付属屋等が描かれ、海辺らしい立地を看取することができる。また、斉熙が葛飾抱屋敷へ移居した日に当る文献16文政8年2月27日条には、この屋敷が「海鹵ヲ埋メ園圃ヲ築キ其廣凡二十四萬歩、馬埒射圃皆具ル、號白鎮海園」

図9 葛飾御屋敷図三枚之内(1)(⑥)の平面図

之助様御座所」「御裏御殿」の建設、「卿之助様御座所」の取壊しが行われ、斉熙、娘3名、卿之助、正室の移居と対応していた。

図2-1の12棟中最も規模の大きい56坪の棟は⑤(図3)での「古御茶屋」に該当し、名称からしても以前から建てられたと考えられる。⑤の「御家老」(図3n)は⑥(図4)でも「御家老固屋」として描かれる。これは先に述べた「葛飾御家老」の役宅であったと考えられ、当役の役宅が上、下屋敷内に設けられていた^{*36)}のと同様である。その西側脇に見られる棟(図2-5p)は⑤(図3m)では「手元」とされ、先に挙げた「手元役以下専任兼務吏員数十名」の「手元役」に該当し、家老の配下藩士の居所もしくは詰

と表現されている。この内容は、⑤⑥で建物が配置された部分の南側に複雑な形をした池を中心とする庭園が描かれ、さらにその南側の図5で「此所大堀」とある部分に狩猟用と思われる複数の「鴨堀」が描かれていることと一致する。大規模な屋敷であったことが理解され、建設には多額の費用を必要とした模様である^{*37)}。

5. 「本棟」の平面構成・居住状況

5-1 資料に描かれる平面図の描写時期

⑤では「本棟」内を幾つかに区分しそれぞれに名称を付して表現している(図3a~i)。「御表」(図3a)および「是ヨリ御

奥」(図3b)の書き込みに見られるように、表と奥とから構成されていたことが知られる。⑥(図4)の「御殿」は2色に塗り分けられ、西側を表、東側を奥と区別して表現したものと考えられる。先に、文政8年の斉熙と娘3名との移居に関して、移居と「本棟」完成とが時期的にほぼ一致すること、および、「御表」と「御奥向」とに移居したことを述べたが、「御表」と「御奥向」とは⑤⑥に描き分けられる「本棟」内の表と奥とにそれぞれ該当する。図4では表部分の北西側に「御門」が描かれるが、図3でも同様の位置に門が描かれ、図4で敷地北辺の「御本門」とされる冠木門が図3にも描かれ、この冠木門からの経路が図3に描かれていることから、図4の「御門」が「本棟」の主たる門であったと考えられる。

一方、⑦には建物の平面図とその周辺の若干の庭とが描かれ、全体を図6に、建物平面を図7にそれぞれ示した^{*39)}。図6では建物の上方に池が配され池の右端に「観音堂」が描かれるが、これらの配置状況は⑤(図3)における主たる建物、池、「クワンノン」のそれと一致し、両者は同一の建物を描いたものであることが判明する。⑧には建物の平面図とそれに付属する門、番所、塀とが描かれ、全体を図8に、建物平面を図9にそれぞれ示した^{*39)}。図7と図9とを比べると図7の右上部分が図9と共通することが理解される。

以上の関連を念頭に置いて平面を検討すると、図7右端に「御鈴口」と書き込まれているが、この名称は武士住宅では表、あるいは、中奥部分から奥部分への入口として一般的に用いられることから、図3bの「是ヨリ御奥」とある位置に同じと考えられる。図9ではこの部分は「御式臺」が設けられて「御門」に通じ(図8)、図3、7とは異なっている。図7、9共にここから屈曲した廊下が東へ延び、図7で「御廣間」とされる部屋は図9の「切合」37畳に当る。図9ではこの「切合」と2階56畳とを結ぶ階段が描かれているが、図7でも同じ位置に階段が描かれ、図7にも同様の2階部分が存在していたと考えられる。この2階は図3で「御二階五十畳」(c)とあるのに当る。図7では「御廣間」の東側に雁行型に2室構成の「御座ノ間」、同じく「御高間」、「御鳥座敷」と続くが、図9でも同様に「御座之間」の名称が図7と一致し、また、図3でも同様に「御坐間」(d)「御鳥座敷」(f)の名称が図7と一致する。

以上の部分の北側は、図7と図9とでは異なるが、図7でこの部分から北に向かって延びる4本の廊下が図9においても認められる。即ち、最も西側の、図7で「御客間」とされる部屋の前から延びる廊下は図9では「御臺所」へ達し、2本目から4本目までの3本は図9では建物の端で止まる形で描かれている。図7ではこの4本の廊下の内東側の1本を除く3本が途中まで描かれている。この3本の先の様子については、図2からは3棟の塗垂に続くように見え、一方、図3からは、最も西側の廊下の先は「是ヨリ御奥」(b)と書き込まれた部分の北側に描かれた門に、他の2本は「御醫者」

(k)「御小姓」(l)とある棟、および、2棟の白色の付属屋に続くようにも見え、明確でない。

図7では4本の廊下の内最も東側の1本の先には「常盤」と書き込まれているが、同様に「松葉」「蓬菜」「菖蒲」という書き込みが見られる。これらは機能や性格を表した名称ではなく愛称で、図7の「松葉」の位置に図3では「松葉印」(g)と書かれている。

以上より、⑦は⑤の主たる棟と共通点が多く、この棟が完成した文政8年2月以降の状況を描いていると考えられる。これに対し、

⑧は⑤⑦と相違する点が多く、⑦と⑧との前後関係については、⑦(図7)から表部分と「松葉」以下の4区画とを取り壊し、廊下4本を切り詰め、若干増築し、全体的には規模を縮小して⑧(図9)としたとする説と、将来廊下を伸ばして⑦とすることを越えて⑧を先行して建てたとする説とが考え得る。しかし、すでに述べたように本棟は文政7～8年に一挙に建てられたと考えられることから、中間に図9の段階を経ることは難しい。一方、⑧に付せられ2枚の貼紙^{*11)}の内の1枚には玄関と門は後に付け加えられたとあり、これは⑦を先とする説に合致する。他の1枚には年号として「子正月」が見られ、文政4年の葛柳抱屋敷地購入後では文政11年(1828)、天保11年(1840)以下12年毎が該当するが、文政11年は斉熙と家族が居住していた期間内に当たり、②～⑦の資料が示す姿は5～3で示すようにこうした居住に対応し、これと異なる図9が存在していたとは考え難い。従って、⑧(図9)は⑦(図7)より後の、斉熙と家族の居住が終了した後の姿を描いたものと考えられる。

②に書き込まれる「本棟」の面積(図2-3a)が1,170坪とされ、一方、⑦に描かれる部分は図から約610坪と算出される^{*40)}ことから、両者の差が表を含む残りの面積になる。また、表と奥とからなる「本棟」の構成は上、下屋敷に共通する^{*41)}が、両部分で1,170坪という規模は上、下屋敷に比して小さい^{*42)}。

5-2 平面構成

⑦(図7)では「御表」から通じる「御鈴口」から「御客間」を介して「御廣間」「御座ノ間」「御高間」等が雁行型に並んでいた。図7の「御廣間」に当る図9の「切合」には、御床の脇に「カトウ(=火頭)口」の書き込みが見られ、意匠的な配慮も十分になされた部屋であったと考えられる。これらの部分に「松葉」等の4区画部分が廊下を介して房状に分岐して接続していた。

「松葉」等の4区画のいずれの部分にも、床を備えた「上ノ間」もしくは「御座ノ間」を中心とする2室構成の座敷が見られ、周囲に「御化粧ノ間」「御納戸」「御臺子」等の部屋を付属させている。また、「御上廊下」と「御次廊下」とを並んで設けることにより「松葉」へと「蓬菜」「菖蒲」への動線を分ける工夫がされ、4部分相互の独立性に配慮した設計がされていた様子がうかがえる。

5-3 居住者との対応

⑤(図3)には八重姫(i)、安姫(h)の書き込みが見られ、これらはそれぞれ斉熙の五女、六女(安喜姫)を指し、この2名が居住していた場所を示すと考えられるが、図7では「松葉」の北側の「蓬菜」「菖蒲」「常盤」の内の2箇所だろう。以上から、文政8年2月に移居してきた斉熙と娘3名については、斉熙の居住空間は上、下屋敷の例から推して本棟表部分に設けられていたと考えられ^{*43)}、娘3名の内2名が本棟奥部分の4区画の内の2区画に居住したことが知られ、三女萬壽姫も同様に本棟奥部分の残り2区画の内の1つに居住したと推測される。⑤に萬壽姫の書き込みが見られないのは、この図が萬壽姫が嫁した天保6年以降に描かれたことによると考えられ^{*44)}、これを年表の絵図資料欄に書き入れた。

藩主家族の居住空間であった「本棟」「卿之助様御殿」「御裏御殿」は⑤(図3)では黄色に塗られている。⑤ではこの他に「御裏御殿」東側の棟の南端の「御物見」と「御内證御成坐敷」(図3z)が黄色に塗られているが、前者は「御裏御殿」居住者の正室に付属する部分であったと考えられる。後者は、「御内證」が側室須

磨浦を指すこと^{*19)}、および、西隣に書き込まれる「金子繁平」(図3y)が側室須磨浦の実父であること^{*45)}から、須磨浦に関わるものであったと考えられる。位置からは長屋(図2-3b)、もしくは、建屋(図2-5r)が該当しようが、⑤(図3)で黄色に塗られた棟は①~④(図2)では建屋と呼ばれている^{*46)}ことから推して後者の可能性が高い。この建家の面積は30坪であり側室須磨浦の居住に供するには小規模に過ぎ、また、「御成坐敷」の意味が明確ではないものの居住を示唆する内容とは異なることから、側室須磨浦は本棟奥部分の残り1区画に居住したものと推測される。これら4区画の平面を詳しく見ると、「松葉」では中心となる部屋に床と違棚が備えられ、他の3部分では床と戸棚、あるいは、床のみであるのに比して座敷飾りが最も整っていること、主たる座敷の奥に2室構成の「御祝ノ間」が付属しこれは他の3区画には見られないこと等が見出され、幼少の娘たちとは異なる側室須磨浦が「松葉」に居住した可能性が高い^{*47)}。

以上より、図7に描かれる「本棟」奥部分では、「松葉」等の4区画は側室と娘3名の私的な生活空間と考えられ、それに対して

「御表」から「御高間」までの部分や「御休そく所」は、使用方法を示す資料は見出せないが、名称や位置から、公的な行事や斉熙を加えての行為等に利用されたと考えられる。このような行事や行為に伴う、あるいは、生活に必要な食事の供給等が円滑に行えるよう⑦(図7)に書き込まれる「御飯臺場」や「御膳所」が設けられていたと考えられるが、これら以外に台所が必要となり、また、藩主家族の居住には公私にわたって身の廻りの世話をする藩士^{*48)}や女中が配置され、これらの人々の詰所や居住の場も同様に必要となる。従って、図7で北に向かって途中まで描かれる3本の廊下の先には、台所、藩士詰所、女中衆の長局等が設けられていたと考えられ、⑤で本棟の北側に描かれている「御醫者」(図3k)「御小姓」(同1)と書き込まれた付属屋もこれらの廊下に接続したものであったかも知れない^{*49)}。

一方、⑦に見られた「松葉」等の側室と娘3名の生活空間が⑧には見られないことは、5-1で⑧は斉熙と家族の居住が終了した後の姿を描いたと推測したことに符合する。⑧(図9)は中庭を囲んで式臺棟、台所棟、座敷棟から構成される形で、このような構成は藩内の御茶屋(文献22等)に共通し、藩主やその一族の一時的な滞在や宿泊に対応できるように改築して残したと考えられる。

6. 結び

文政8年(1825)~天保7年(1836)の10代藩主斉熙隠居居住期における葛飾抱屋敷の平面構成、および、藩主家族の居住空間を中心に検討したが、藩主が隠居後江戸の抱屋敷に居住した例は毛利藩では葛飾の1例のみであり、特殊な事例であったと言える。背後に広大な庭園や狩猟地を付属させる点は、江戸市中の上屋敷等とは異なる郊外の隠居屋敷としての特徴であろうが、隠居後とは言え藩主が居住するという点では上屋敷、下屋敷と一致し、主たる建物が表と奥とからなり家老役宅を敷地内に設ける構成も共通する。

葛飾抱屋敷の居住者は斉熙、正室、側室1名、息子1名、娘3名であり、本棟の表部分に斉熙が、奥部分に側室と娘とが居住したと考えられ、さらに、息子が西御殿に、正室が裏御殿にとそれぞれ別棟が設けられた。本棟を表と奥とに東西に2分する線を境に敷地西

側に男が、東側に女が居住した点、正室が裏御殿に居住し、側室とその実の娘が本棟に居住したと考えられる点、および、側室の実父の名前が記された建物が敷地内に見られる点も興味深い。

毛利藩主が隠居後萩居城や江戸上屋敷から移居した例は、斉熙以外に元和~寛永年間の輝元、天明~寛政年間の重就の2例が見られる。両例については平面構成、居住状況に関する研究が発表されている(文献8、20)。また、葛飾抱屋敷の他に、正室、側室、子女等が居住に利用した毛利藩の施設としては上、下屋敷の奥部分、中屋敷、萩の複数の御殿が挙げられ、これらの内、萩の御殿については同様の発表を行った(文献21)。今後はこうした事例との比較検討を通じて、総合的にとらえる必要が生じて来よう。

【謝辞】本稿をまとめるに当たり、主として資料に関して山口県文書館の協力を得たことを付記し、謝意を表したい。

注

- 宮崎勝美「江戸の土地-大名・幕臣の土地問題」(吉田伸之(編)『日本の近世9 都市の時代』中央公論社、1992、pp.131~133)、高橋康夫ほか(編)『図集日本都市史』東京大学出版会、1993、pp.196~197。
- 原田佳伸「江戸場末百姓地の宅地化とその要因-武家抱屋敷をめぐる幕府支配・武家・代官・百姓の動向-」(『関東近世史研究』第29号、関東近世史研究会、1990、pp.1~20)、同「村の中の武家地-武家抱屋敷の土地・貢租をめぐる諸相-」(宮崎勝美、吉田伸之『武家屋敷・空間と社会』山川出版社、1994、pp.157~192)。
- 内藤昌「江戸と江戸城」鹿島出版会、1966、内藤昌ほか「安土城」(『国華』第987号、1976)、波多野純『城郭・侍屋敷古図集成江戸城Ⅱ』至文堂、1996、吉田純一『福井の城』フェニックス出版、1994等。
- 藩政期には毛利藩は葛飾以外に、若林、小名木川、北品川、大塚、芝田町、芝増上寺内、奥鴨に抱屋敷を所有していた(文献17、pp.192~194)。
- 文献10の著者頼山陽(1780~1832)は9代藩主斉房の頃より毛利家に入りし、文献10の内容は葛飾抱屋敷竣工後のものである。
- 敷地には「松平大ゼン」と書き込まれているが、毛利藩主は代々松平大膳大夫を名乗り、同図に描かれる上屋敷にも同じく「松平大ゼン」と書き込まれている。
- いずれも山口県文書館蔵、〔〕内は区分31小々控、58絵図内の分類番号。
- ①文書中に、立花、毛利両家家来連で文政4年5月26日付の「口上之覚」として「大貫次右衛門様当分御預所砂村新田之内、惣地面老萬七千七百七拾坪、有来家式百九拾坪御役人足賃銀附抱屋敷、外二地續平井新田之内四万三千八百四拾四坪之町並屋敷共、一圓に立花左近將監政所侍候處、右抱屋敷之方有来三拾九坪之建家老棟、五坪同老棟、同四拾坪老棟、同四坪老棟、五坪之同老棟、五拾六坪同老棟、八坪同老棟、三坪同老棟、拾四坪同老棟、拾五坪同老棟、稻荷社老ヶ所、北之方開潜付門老ヶ所、片開木戸門五ヶ所、其外有形之儘由緒茂御座候付、此度相対を以松平大膳大夫殿江讀渡申度、絵図面口上を以相願」とあり、ここに言う「絵図面」が①に当る。
- 「葛飾御屋敷内西之方江建家長屋宅軒宛、北之方江長屋老棟、掘抜井戸式ヶ所新規補理願之事」と題した、毛利藩士、砂村新田名主、年寄、平井新田名主連名の文政8年5月26日付の文書に「柑本兵五郎様御代官所砂村新田之内、惣地面老萬八千八百七拾五坪、開百八拾五間半、有来家坪式百三拾六坪五合、増家式千七百坪願済、當時家作千九百式拾三坪御役人足賃銀付抱屋敷、同所地續九百坪之抱地、外二同領平井新田分四万三千八百四拾四坪町並家作御免地共、一圓二松平大膳大夫所持仕候處、右抱屋敷之内西之方江百式拾坪式合五勺之新規建家老棟、同方江梁間式間桁行拾六間半此坪四拾坪式合五勺之新規建家老棟、尤右式棟共為火除屋根並瓦差置申度、并北之方江梁間式間桁行九間半此坪式拾三坪七合五勺之新規建家老棟、屋簷葺二家作仕度」とある。
- 「葛飾御屋敷内西之方江建家長屋宅軒宛、北之方江長屋老棟并掘抜井戸式ヶ所新規補理可被仰付候事」とある箇所に「柑本兵五郎様御代官所砂村新田之内、惣地面老萬八千八百七拾五坪、開百八拾五間半、有来家坪式百三拾六坪五合、増家式千七百坪願済、當時家作千九百拾坪式合五勺御役人足賃銀付抱屋敷、同所地續九百坪之抱地、外二同領平井新田分四万三千八百四拾四坪町並家作御免地共一圓二松平大膳大夫所持仕候處、右抱屋敷之内北之方江八拾七坪之新規建家老棟、同方江梁間式間桁行拾間此坪式拾坪之新規建家老棟、右三棟共為火除屋根並瓦差置申度、同方江梁間式間桁行四間此坪八坪之新規長屋老棟、屋簷葺二家作仕度」とある。
- 片方には「御玄関御門共来御在府之上建方仕候事」とあり、他方には「子正月御前御用二付於江戸調被仰付、御歸城之上周布勘ヶ由を以差上置候處、一應御見分相済候二付、先御下ヶ置被成候、追而御用之節差出候様二つの御事二付、同人を以御下ヶ置被成候事」とある。ここに挙げられる周布勘ヶ由は天保2年3月に表番頭から記録所役に、天保5年9月に直目付に任じられている(文献16)。
- 毛利藩士、砂村新田名主、平井新田名主連名の文政7年8月22日付の「口上之覚」として「山田茂左衛門様当分御預所砂村新田之内、惣地面老萬七千七百七拾坪、増家式千七百坪、有来家式百式拾九坪之御役人足賃銀付抱屋敷、同所地續二而右御同人家御代官所平井新田之内四万三千八百四拾四坪之町並屋敷共、一圓二いたし松平大膳大夫所持いたし候處、右抱屋敷内千七百七拾坪之本家老棟家作仕候外、右家作廻り内掘抜井戸式ヶ所新規補理申度、并梁間式間半桁行七間三尺之下屋取込式拾坪宛之塗垂三棟、梁間式間半桁行三拾四間九尺之下屋上梁間江下屋之内三尺取込此坪百三拾

六坪之長屋老棟、梁間式間桁行七間半此坪拾五坪之内（同か）老棟、梁間式間半桁行拾六間九尺之下屋尤梁 間下屋之内三尺取込此坪六拾四坪之同老棟、梁間式間半桁行式拾七間半九尺之下屋尤梁間下屋之内三尺取込此坪百拾坪之同老棟、梁間式間半桁行式拾七間半九尺之下屋尤梁間下屋之内三尺取込此坪八拾六坪之同老棟、梁間式間半桁行八間三尺之下屋取込此坪式拾四坪之同老棟、拾坪之門番所老棟、右拾老棟共新規家作仕度、尤何度為火除屋根並瓦二いたし度、外二拾六坪之建家老棟屋根茅葺二新規家作仕度、有来式拾坪之建家老棟、八坪之同老棟、三坪之同老棟、拾四坪之同老棟、右四棟東之方江引、元形之通屋根茅葺二建替作仕度、并有来木戸門三ヶ所是又東之方江附替作仕度、北之方表通り長延百五拾六間生垣取拂、跡百四拾七間半欄矢来二新規作仕度」とある。

- 13) 現在の江東区南砂、東砂、新砂に当り、抱屋敷の痕跡は遺されていない。
- 14) 毛利藩は寛政2年（1790）7月に葛飾抱屋敷を農家より買入れた（文獻17、p.192）が、①文書中に「葛飾郡平井新田御抱屋敷、享和二戌ノ年十一月堀田大蔵大輔様江御譲渡相成候地所當時立花左近将監様御所持被成候を此度此御方江御譲請被成度」とあるように、享和2年（1802）に堀田大蔵大輔に譲り、再度文政4年（1821）に譲り請けた。
- 15) 天保12年に松平大和守に、弘化2年に松平出羽守に割譲した（文獻17、p.192）。図1が描かれた安政6年（1859）は弘化2年の割譲後に当り、図1では周囲の敷地に弘化2年に割譲した相手の「松平デハ」と書き込まれ、また、後に示す斉熙居住時の敷地に比して縮小されている。
- 16) 二男は文政5年に11代藩主の養嗣子となり、長女は文政6年に11代藩主斉元に嫁し、長男、二女、四女は文政7年以前に早世した。三男、三女、五女、六女は文化13年、文政元年、3年、6年生まれで、文政8年時点でそれぞれ9歳、7歳、5歳、2歳であった。
- 17) 文獻12文政7年2月晦日条に「大御前様御機嫌能今晦日麻布御屋敷暫時被遊御引移」とあるように、土屋敷から麻布下屋敷へ移居している。
- 18) 側室志津は花ノ井とも呼ばれ（文獻18）、文獻16文政2年11月15日条に「花の井斉熙公側室昇進御長屋ト唱フ」とある。
- 19) 文獻16文政11年（1828）7月21日条に「須磨浦斉熙公妾昇進御内證様ト唱フ」とある。
- 20) 先に示した文政7年12月の「御二方様并御子様方御一所二」という方針が実現されたことすれば、以後の移居状況と対応させると、「御二方様」が正室と側室須磨浦とに、「御子様方」が卿之助、萬壽姫、八重姫、安喜姫とにそれぞれ該当する。また、側室住崎に関する記述は見出せない。
- 21) 文獻16天保元年（1830）3月の「江戸吏員」を書き上げた文書に「葛飾御家老」として浦木工、繁澤図書書の2名の名が見られる。同文獻10年（1827）9月朔日条に「當役国司信濃村ニヨリ、浦木工老公附當役暫時當役ノ事務ヲ兼シム」とあり、「葛飾御家老」は「老公附當役」とも呼ばれた。
- 22) 文獻16文化13年（1816）5月5日条に「夫人裏老久芳安積、鮎川太兵衛、貞操夫人裏老三浦内左衛門」が見られ、当時の10代藩主斉熙正室である「夫人」のみならず、当時すでに死去していた9代藩主の正室であった貞操院に対しても裏老が付けられている。
- 23) 図2-1には①に墨書きされる敷地、建物12棟、門6箇所を示し、書き込み文字は方位の一部、隣地に書き込まれるものを除いて全て書き入れ、建物に付記される坪数は「四十坪」は「40」と書き入れた。
- 24) ①に書き込まれる「砂村新田抱屋敷」2箇所の面積を合計すると17,770坪となり、「平井新田並屋敷」の面積は43,844坪とされ、①文書（注8）の内容、数値と一致する。町並屋敷は抱屋敷の約2.5倍の面積であるが、①では後者の方が狭く描かれている。
- 25) 注8には「有来家」として209坪と書かれ、また、①文書中には「家作十一棟二面式百九坪」とする同様の表現が見られる。①に描かれる12棟の坪数の合計は216坪となるが、この内7坪の1棟は②以降と対照すると稲荷社と考えられ、これを除く11棟の坪数合計は209坪となり、①文書と棟数、面積が一致する。また、注8には建物と面積とが列記されているが、稲荷社を除く10棟の面積合計は189坪となり、①と対応させると冠木門東脇に描かれる20坪の建物1棟を書き落としていると考えられる。
- 26) ①に描かれる6箇所の門は、書き込み、位置を考え併せると、注8に言う「北之方兩開潛付門壹ヶ所、片開木戸門五ヶ所」と一致する。
- 27) 図2-2以降では上部の町並屋敷部分の上半部を省略して示した。また、図2-2の表現方法は図2-1（注23）と同じである。
- 28) 図2-3には貼紙の範囲を破線で示し、建物は墨書き、朱書き、朱書き黄色塗りの3種類に分けられ、図2-3でも区別して表現した。建物以外の門、水路、橋、敷地区分境等にも朱書きが見られ、これらも太線で表現した。凡例に示したa～l以外の建物に付されている数字は②で各棟に付記されている坪数である。②～④には井戸が描かれているが、図2では省略した。
- 29) 広辞苑に塗垂は「土蔵から底を作り出して塗屋にした家の造り」とある。
- 30) 図2-4、2-5では下部の川を省略して示した。③文書（注9）では②文書（注12）に加えて抱地900坪が「同所地續」として書かれているが、これは②で2箇所の抱屋敷に挟まれていた部分の南半分が③で抱地とされ、その東西境界線が朱書きされている（図2-4）ことに該当しよう。
- 31) 注10の建物を列挙している箇所では、前半の「右三棟」の内訳としては87坪の建屋と20坪の長屋との2棟のみが挙げられ、この2棟と後半の8坪の長屋との3棟は図2-5のq、p、sにそれぞれ対応し、rについては書き落としたと考えられる。
- 32) ⑤原図では建物は外郭線で描かれるものと屋根を付して姿図風に描かれるものとの2種類に描き分けられているが、図3ではこれらを区別せず外郭線で描く方法に統一し、細い水路や植栽等は省略した。⑤では建物相互や建物と門をつなぐ道筋が描かれ、これも図3に一点鎖線で示した。また、⑥原図に描かれる細い水路、土手、道筋、植栽等も図4では省略した。両図とも建物は3色に塗分けられ、これを図3、4でも示し、水路部分は（水）と表示した。図3では醫は医と略記した。
- 33) ⑤⑥に描かれる敷地全体は一致し、紙幅の都合から寸法等の書き込みが多い⑥のみを示した。⑥に描かれるものの内、敷地形状、往還、川筋のみを示し、書き込まれている距離寸法は「式百六間半」は「206.5」のように書き入れ、書き込み文字も距離、面積等に関するもののみを書き入れた。図4は図5の斜線部分とその東側の区画に当る。
- 34) 「此所大堀」部分が文政9年に完成したことは、文政8年5月以前に描かれた①～④（図2）にはこの部分に該当する敷地が描かれていないことと符合する。
- 35) 図2で平井新田と砂村新田とを分ける線は図5でも平井新田と砂村とを

分ける破線として描かれること、および、図2-3の書き込みに見られる「柵板塀」156間と図5の敷地北辺に書き込まれた寸法3箇所の内西端の156間とは位置、大きさが一致することによる。図2-3の「柵板塀」156間と図4の156間に相当する部分（注33）との長さを一致させて作図した。

- 36) 「江戸櫻田御屋敷図」（嘉永4年写、山口県文書館蔵）に「御家老小屋」が、「江戸櫻田御上屋鋪新御作事御指図」（同蔵）、「江戸麻布御屋敷土地割之図」（同蔵）に「当役固屋」が描かれている。
- 37) 文獻16文政11年（1828）11月10日条に「葛飾邸入費金不足ヲ告ク、本部財政困難ニヨリ町村へ借上銀ヲ命ス」と記される。
- 38) ⑦原図には柱型が描かれず、畳数も記入されていないので、具体的な寸法が不明であるが、⑧との共通性や標準的な床寸法等を基に描いた。原図には部屋が緑色、廊下が黄色、縁が灰色、床、棚、土間、中庭等が白色と塗分けられるが、白色で書き込みがない部分に空地か棚類か明確でない箇所が若干あり、これらについては筆者が判断して図6を描いた。部分的に障子、から紙等の間仕切を示す書き込みが見られるが図7では省略した。
- 39) ⑧原図には2階部分2箇所が貼紙で描かれ、これも図9に描き1階との対応を一点鎖線で示した。原図には部屋毎に畳数が書き入れられているが、図9では広さの目安とするため一部を（8）＝8畳という形で書き入れた他は省略し、また、せうし四、フスマ三等の間仕切を示す書き込みは、本文との対応に必要な若干のものを図9に書き入れた。図8は図6と、図9は図7とそれぞれ縮尺を同じに描き、図7、図9では臺は台と略記した。
- 40) 610坪は1階部分の面積であり、図7の「御廣間」上部に図9と同様の2階部分（図より59坪と算出される）が設けられていたとすれば、延床面積は約670坪となる。また、図2-3 aに示される1,170坪が1階部分の面積か、2階を含んだ面積かは明確でない。
- 41) 「江戸上御屋敷極りの惣指図」（明暦2、山口県文書館蔵）や「江戸麻布御屋敷土地割之図」（同蔵）等の絵図からこうした構成が確認できる他、後者図中の書き込みや文獻14、「櫻田御普請諸沙汰控」（安永9、同蔵）等にも、下屋敷について「御表御殿」「御裏御殿」の語が見られる。
- 42) 安永9年～天明3年の上屋敷再建を記した文獻15には3,661坪4合5勺（長屋共）とされ、文獻14には下屋敷の御表御殿592坪、御裏御殿（長局駕籠部屋共）約1,114坪、若殿定二郎東御殿（長局共）約1,092坪、長屋御殿等の付属屋約1,542坪、計4,630坪余とされる。
- 43) 本棟表部分を描いた図面は見出せず、建物内容に関する資料は乏しいが、文獻13には天保7年の正月2日条に「大殿様御座の間出御、繁次郎殿被召出御見見」、同25日条に「於御座之間御連歌」とあり、主たる座敷を「御座之間」と称していたと考えられる。
- 44) ⑤に「卿之助様御殿」が描かれているのは、天保3年に卿之助が葛飾抱屋敷を去った後もその御殿建物が遺されていたことによると考えられる。
- 45) 文獻18、p.116。これには「文政十二年（須磨浦の）実父金子繁平ヲ譜代家臣二列シ高九十九石五斗支給」とある。
- 46) ②貼紙朱書以降に建てられたものに限れば、⑤（図3）で黄色に着色される本棟、卿之助様御殿等は②～④で建家とされ、長屋とされるものは⑤で「手元」（図3 m）、「諸役人固屋」「相撲部屋、組ノ者固屋」（図3 t、u）「御厩」等の身分の低い侍者の居所や詰所、あるいは、実用的な建物である。
- 47) 御服ノ間、御茶席は「松葉」と「常盤」にのみ見られ、御茶ノ間は「常盤」と「菖蒲」にのみ設けられ、御湯殿は「松葉」と「常盤」にはそれぞれ設けられるのに対し「蓬萊」「菖蒲」部分には小規模なものの1箇所のみが設けられ、「常盤」にのみ「上ノ間」ではなく「御座ノ間」の名称が使われている等の相違点が見出せるが、これらを基に居住者を判断するのは困難である。
- 48) 文獻19には「諸公子姫及側室二随従スル」役職として、「會計役」の「算用方」、「膳部ヲ司ル役」の「御廣式」、「醫者」等が挙げられている。
- 49) 藩主家族が居住に利用していた萩城下の御殿の例（文獻21）では、台所部分と座敷部分とを結び位置に御膳所、もしくは、御膳立と呼ばれる部屋が、式台近くに御醫者部屋、御算用方等の部屋がそれぞれ設けられ、また、女中の居所である長局も設けられていた。

参考文献

- 1) 平井聖『日本の近世住宅』鹿島出版会、1968
- 2) 佐藤巧『近世武士住宅』叢文社、1979
- 3) 藤村泉『武士の住居』（日本の美術269）至文堂、1991
- 4) 平井聖「明暦2年毛利家江戸上屋敷指図について」日本建築学会大会学術講演梗概集、1968、10、pp.843～844
- 5) 平井聖、後藤久太郎「毛利藩江戸上屋敷指図について（1）～（3）」日本建築学会関東支部研究報告集第44号、1973、pp.231～242
- 6) 北野隆、尾道建二「毛利家文書「江戸屋敷」の指図について」日本建築学会中国・九州支部研究報告第2号、1972、pp.257～260
- 7) 井上佑「江戸毛利藩邸・抱屋敷の跡を訪ねて」（『山口県地方史研究』79、1998、pp.41～54）
- 8) 北野隆、藤本豊治「近世初期の武家屋敷に関する研究、その2、毛利輝元隠居屋敷について」日本建築学会九州支部研究報告第40号、2001、pp.425～428
- 9) 貝塚英平、清水靖夫（編）『東京都市地図1 東京東部』柏書房、1995
- 10) 頼山陽「江戸葛飾邸鎮海園の記」山口県文書館蔵
- 11) 「大殿様付諸沙汰控」文政7～天保6、山口県文書館蔵
- 12) 「斉熙公御前様付諸沙汰控」文化6～天保13、山口県文書館蔵
- 13) 「葛飾御當役座日記」天保7～9、山口県文書館蔵
- 14) 「江戸三御屋敷新御作事記録」明和9、山口県文書館蔵
- 15) 「桜田上御屋鋪御普請記録」安永9～天明3、山口県文書館蔵
- 16) 「毛利十一代史」公磨毛利家蔵版、明治40
- 17) 時山弥八「もりのしげり」私家版、大正5
- 18) 「歴代略歴表」（文獻17 pp.35～134）
- 19) 「舊長藩職役一覧表」（文獻17 pp.277～330）
- 20) 岡田悟「毛利藩における三田尻御茶屋について」日本建築学会計画系論文報告集第444号、1993.2、pp.127～137
- 21) 岡田悟「藩政期における萩の御殿について」同論文集第574号、pp.177～184、2003.12
- 22) 岡田悟「毛利藩主国廻り時の休泊に用いられた御茶屋について」同論文集第464号、pp.181～189、1994.10

（2004年9月7日原稿受理、2005年2月8日採用決定）